

2022年度GTセミナー GTサミット2022②

第288号 2022年9月5日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社ガガヤ 奥山卓矢

GTサミット②

2022年8月22日～23日に「GTサミット2022」を
開催しました。

全国のGT園の園長先生方にご参加頂きました。
数年ぶりにお会いする園長先生方同士の歓喜の声も会場では
聞かれました。

本誌含め、4回に分けてGTサミット2022の内容をお送りする
予定です。

【セミナープログラム】

8月22日(月) セミナー1日目

- 13:30～15:30 阿久津先生 ご講演
- 15:30～15:50 休憩
- 15:50～17:50 藤森代表 ご講演
- 18:00 1日目終了

8月23日(火) セミナー2日目

- 9:30～11:30 リレー講演
- 11:30～13:00 昼食
- 13:00～15:00 Q&A
- 15:00 2日目終了



目次

—新しい時代に対する保育方法—

—かかわりを大切にした保育—

—たてわりではない異年齢児保育—

—グローバル化・多様化—

—対立やジレンマに対する力—

—インクルージョン—

—新しい時代に対する保育方法—

- ①かかわりを大切にした保育（乳児から必要な子供集団からの学び）
- ②たてわりではない異年齢児保育
- ③子ども主体の保育（子どもの参画）
- ④ねらいに応じた選択制の保育
- ⑤チーム保育（職員集団と保護者と地域）

新しい保育を提案しているが、「見守る保育」や「藤森メソッド」と言ったり、どんな保育かをまとめてはっきりしたが、時代性はもちろんあるが、日本の大学生の競争力が、1990年代はOECDの中でトップだったが、20年には最下位になっている。知らないうちにどんどん下がっています。世界の競争力が下がってきていることに加え、円安など給料も安いので外国の人の方が高つく。昔は安いから海外の労働者を使っていたが、日本の労働力が一番安くなってきてしまっている。

—かかわりを大切にした保育—

まず提案したいのが、①子ども同士の関わりを大切にした保育。特に乳児からの関わりを大切にした保育。一番訴えたいことです。「保育とカリキュラム」の雑誌があるが、この特集が「見守るは、見ているだけ？」という特集です。見ているだけ？というのが出て、「見守る」が認知されてきたなと思いますね。見ているだけではないということがテーマだが、これを書いたのが篠原先生、元文科省の調査官。今は聖徳大学の大学院教授らしいですが、「見守る」はよく言うが、見ているだけではないと書いてあります。うちの安藤君が、この本に対して自分たちの考えている「見守る保育」はどういうものかを作ってくれました。子どもの主体の重要性は様々なところで言われています。見守る援助のはずが、見ているだけになっていることもしばしば。と書いてあります。（中略）

—たてわりではない異年齢児保育—

異年齢の一つの意味が、履修主義から習得主義へ。学校教育も変えようとしているが、これまでは履修主義（日本の学校）：同年齢の子を一斉に入学させ、学習内容が定着していなくても決まった時期に卒業させる日本の義務教育。

「一律・平等」のもと、教育水準の底上げに効果があった。しかし外国は習得主義を取ります。

習得主義

目標の達成度に応じて進級を決める。一人一人に応じた学びを実現する土台となる。現在イノベーション会議で提案されているが、学校教育もこう換えていきたいと思います。一人ひとりのニーズに合った教育をすべきだと提案されています。学年を該当年齢で構成するのはやめましょう、と提案されています。習熟しているかどうかで決めようと考えているのが、私の異年齢児保育です。異年齢で触れ合う、異年齢だから優しさが出る、社会性は出るというのは昔からあるが、一人一人の発達・ニーズに合わせてやっていくべきだという異年齢の考え方です。当たり前のようだが、提案している人がなかなかいません。発達は順序あるので、5歳だからじゃなくて、年少だからプールは浅い、年長だから深いとどうしてそう決めるのと思いますね。怖い子だったら5歳だって浅くすべきだし、スイミングに行って平気な3歳なら深くてもいいが、年齢で決めてしまうのが日本の履修主義ですね。それは発達のねじれが起きてしまう。特性に応じて伸ばしていこうというのが一つ目です。2つ目以降は、たまたま学研の外国籍の話をした時に異年齢の話をしました。これからのグローバルの時代になった時に私の園の子どもたちが差をつけないですね。例えば障害の子、他の園にいくと障害の子が走り回ると、つられては走ると聞かすが、うちの園児ではあまり関係ないですね。コロナか、何かわからないが、パニックったりする子がいるが、それまで一緒に遊んでいた子も、突然知らん顔をしてくれる、その子が落ち着いたら一緒に遊び始めている。それからお集まりだからって、障害の子がブロックをしても、自分たちもやりたいではなく、その子には必要なことだとそっとしておいてくれる。同じように外国籍の子がいても変わらない。卒園した子が、どんな特徴があるかを話し合いをした時に、例えば不登校の子が登校したときに、周りの子は大丈夫だった？と聞かすが、うちの園児は昨日まで来たかのように普通に接してくれると保護者が感動していた。なんでかを思ったときに一つがグローバルの時代になるとこういわれています。

—グローバル化・多様化—

例えば、移民増加に伴って、学校のクラスや職場など様々な場所において、民族的・文化的・言語的な多様性が増大しています。そうすると、他者への共感性とか、異なる文化に対する敬意とか、自己意識といったスキルがより重要になってくるものです。

これらを身に着けるのは異年齢児保育の一つの役割かもしれないと思った。履修主義にするのも一つだが、異年齢の目的は、外から見える姿の刷り込みをなくすということで、子どもを男女、年齢、障害、国籍によって判断するのではなく、その子の特性、発達によってその子の課題を見つけていくことです。ですから、相手が男や女とかではなく、年齢でもなくて、345歳の一人の子がオセロをしようと選ぶ相手は、オセロが自分と同じくらい強い子を選ぶということで、個人の特性を見ることが異年齢で慣れているのだらうなと思います。二つ目は違いを知る。子どもたちは社会に出ると、様々な年齢、国籍、特性を持った人の中で生活することになります。同質・均質の集団の中で育つと、違う人に対して何を考え、どのような行動をするかわからない。彼らと仕事することにストレスを感じたり、対立をしてしまい、人間関係がうまくいかない理由でドロップアウトしたり、引きこもったりする若者が急増している。小さいうちから多様性の中で育つことで、年齢による行動、考え、言葉の違いを知っていくことが異年齢の目的の一つです。そうすると、これから必要な力として、OECDがあげているのが変革をもたらすエージェンシーし

て3つ挙げています。一つが「新たな力を創造する力」。2つ目が「責任ある行動をとる力」。3つ目が「対立やジレンマを克服する力」と書かれています。

—対立やジレンマに対する力—

この原型となったのは、DeSeCoのキー・コンピテンシーの柱の一つである「異質な人々から構成される集団で相互にかかわり合う力」としています。もちろん、これからの時代においても「異質な人々から構成される集団で相互にかかわり合う」ことが重要です。2030年においては、例えば、これまで以上に移民が増えることが予想されています。今後、移民などが増えてくれば、より様々な文化的・宗教的背景を持つ人々と接する機会も増えてくるでしょう。交流の機会が増え、また交流が密になるほど、その場限りでの表面的な付き合いだけでは済まずに、一定の対立やジレンマ、トレードオフの関係が生じてくることは必然とも言えます。そうした場合には、単に対立やジレンマを回避したり、先送りするだけでは解決につながらないと言います。関係者が納得できるような解決策を見つけ、折り合いをつけることが必要になってくるのです。

—インクルージョン—

インクルージョンは、文字通り「すべての子どもたちを包み込んでいこう」する理念です。この「すべての子どもたち」という概念や中心が国によって若干違いがあります。アメリカ合衆国では、黒人の公民権問題が発端で白人と黒人の統合を目指すこと、差別をなくすことから障害児と非障害児との統合教育が始まったと言われています。少子化の中で移民を大量に受け入れつつある欧州では、多民族・多文化国家として、他国籍の子どもたちに対して、また世界共通な課題として、貧困によって差別を受けている子どもたちにとって、社会的にも、社会構造が大きく変動する中で、社会からの疎外・排除されてきた人たちを包括する「ソーシャル・インクルージョン」という概念が注目されています。これは、精神・知的・身体に障害のある人、高齢者や子ども、失業や貧困、薬物依存といった問題を抱える人、セクシャルマイノリティ、定住外国人などが、共に生きる豊かな社会をつくっていく新しい取り組みです。

日本はもともと「おなじ」であることへの固執、優劣へのこだわり、経済優先への過熱などの偏りが強く、そのひずみがあったところにあられ、生きにくい社会になっています。これまで社会から疎外・排除されてきた人たちだけの問題ではなく、不況によるリストラ、いじめや引きこもりなどの新たな問題も生じる中で、あらためてソーシャル・インクルージョンをキーワードに、生きやすい社会を作っていくことが求められています。そこで私たちは、「おなじ」と「ちがい」に社会的なバランスを与え、その力をいかして人間的つながりのある多様な社会をめざすことが重要だと考えています。人間のなかにいながら人間のなかにいなかった人たちが人間のなかに戻っていく、という新しい人権文化を築いていく必要があります。

- ・ 障害児とのインクルージョン保育（支援学級）
- ・ 性におけるインクルージョン保育（ジェンダーフリート男女共同参画）
- ・ 貧困におけるインクルージョン保育（2極文化）
- ・ 国籍によるインクルージョン保育（多国籍の子ども）
- ・ 年齢によるインクルージョン保育（異年齢児保育）
- ・ インクルージョンから考える「統合施設」（幼保一元）
- ・ インクルージョン保育（共生保育）

異文化と日本伝統文化ゾーンがあったが、全体で多文化ゾーン（日本文化も含む）ようにした。異年齢は、本当はおかしいかもしれない。いろいろな文化があるんだ、その中に日本の文化がある。というように、いろいろな文化に敬意を払う。そういう意味で、もっとすべての子どもを包括する考え方がもともとのインクルージョンの保育。どうも最近保育学会を見ても、インクルーシブの保育を見ても、障害児の統合保育です。そうではなくて、不登校にしても、すべての子にすべての教育をという考え方です。新しい時代によって同じような言葉を使っても、私たちが提案する保育。これも子ども主体の保育の中で私が独特な考えは参画。これは世界で起きていることです。子ども主体というのは、子どもが参画するために具体的に行うのが選択制です。④の選択制保育は、③の子ども主体の保育（子どもの参画）と一つにするという考え方です。それから最後がそれを支えるのがチーム保育。チーム保育で最近分かってきたのが、スイスチーズシステムという外国で研究されています。企業がリスクをどうするかで、一つのスイスチーズは穴だらけ。2つ重ねると穴がふさがる。3つ重ねると穴がなくなる。穴が通ってしまうとリスクがあるという考え方で、これが一つのチーム保育の意味で、昔の言い方のベテランに新人を付けるチームという意味ではなくて、複数の目で支えることが大事だろうとスイスチーズの考え方であるそうです。新しい考え方で、これまであまりなかったかもしれません。大きく4つが藤森メソッドのです。それぞれが深めていってほしいと思います。研究や時代性で言われていることだと思います。私たちがやらないといけないのは時代を読むこと、分析する力、分析したことを改革していく力がリーダーに求められていることだと思いますので、皆さんも勇気を出して変えていくことを広げていってほしいと思います。こういう会が出来てよかったです。ありがとうございました。

本稿は、2022年8月22日に開催した「GT サミット 2022」の基調講演の内容をまとめたものです。

（文責/奥山卓矢）